



Title	潜研堂詩注
Author(s)	近藤, 光男
Citation	北海道大学人文科学論集, 7, 1-37
Issue Date	1969-10-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34294
Type	departmental bulletin paper
File Information	7_PR1-37.pdf



潛研堂詩注

近藤光男

潛研堂とは清の錢竹汀、名は大昕（二七二八一八〇四）の讀書室の名である。乾隆三十三年（一七六八）四十一歳、嘉定縣の城中に宅を買った時はじめて「潛研」の扁額をかけた。その集を潛研堂集といい、文集五十卷、詩集十卷續集十卷がある。ここに竹汀の詩に注するのは、清朝學人の詩を文學史的に位置づける作業のために、基礎的な資料を整備することを目的とするものである。

わたくしのいわゆる清朝學人の詩とはなにかについては「清詩選」（集英社漢詩大系22）解説および「惠棟と錢大昕——清朝學人の詩の系譜——」（吉川博士退休記念中國文學論集）において述べており、また錢大昕の人と詩については清詩選小傳および「錢大昕の文學」（東京支那學報第七第八號）があるので、重複を避けてここには一切省く。

木棉花歌

潛研堂詩集卷一にみえる。乾隆十二年丁卯（二七四七）年二十歳、江寧鄉試に應じたころの作と推定できる。なぜならほぼ作年排列をしている潛研堂詩集にあつて、「京口」「登燕子磯」「過明孝陵」などの作がこの詩の前に在り、卷一は「宜興道中」で終る。そして卷二の中ほど「閩七夕」に「戊辰」と注するのによつてほとんど確信がえられる。下平覃韻の一韻到底。凡そ四十七韻、九十四句より成る長篇の歌行體である。覃韻は陰韻であるといつてよい。詩

人はその才覚をあらわそうとするとき、とかく「日」韻尾を用いるという。蘇軾が嘉祐六年（一〇六二）二十六歳にして簽書判官として着任した鳳翔府に在って鳳翔において見るべきもの八つをうたいあげた鳳翔八觀詩は、名篇「石鼓」が知られるが、他の一つに「東湖」があつて、覃韻の一韻到底、凡そ三十韻より成っている。潛研堂詩集を通じて東坡詩に和韻次韻する作はなほ多い。若年の錢大昕が覃韻詩四十七韻をものしたのとこの蘇軾「東湖」詩とは、おそらく無關係ではあるまい。竹汀居士自訂年譜の乾隆十年乙丑年十八歳に、東坡の「戲作賈梁道」詩を読み、晉書を引いてその失を糾したことを記している。

さてこの錢大昕の木棉花歌には木棉の植栽から製布に至るまでの工程が一詩の中にひととおりうたいこまれている、というよりはじめからその意圖をもつもののように思える。また錢氏は、元來は中國になかった棉花がいつ、いかにして流伝したかについて、木棉と草棉との種別を分けつつ考察を試みる。錢大昕がまだ弱冠にして詩人の名のみたつていた時期の作ながら、後年清一代の學者、とくに史學者となるひとの識見が、すでにこの詩に充分うかがえるわけである。従つていまこの詩に注して一々典據を明らかにしてゆくことは、正史はもとより、類書・本草書のたぐいに及ぶまで、錢氏の廣般な讀書の跡をたどることとなり、錢大昕の學問の方法を探る手がかりを得ることもなるのである。

一方、棉花の播種から製布までの過程を知らなくては、この詩はほとんど讀めないのであるが、それには幸い昭和十二年に滿洲棉花協會の囑によつて吉川善之博士が譯出された御題棉花圖がある。御題棉花圖というのは乾隆三十年（二七六五）に直隸總督の方觀承が撰進したもので、「布種」から「練染」に至る凡そ十六圖の毎圖に、觀承の手に成る解説と乾隆帝御製の七絶一首および觀承自作の七絶一首を附載する。吉川博士によつて譯出されたのは方觀承の解説と跋とであり、「今や將にその傳承を失せんとしている」「かかる手工業の工程」（昭和十二年十二月「譯者のことば」）を保存しようとの意圖がこめられている。その記述は天工開物のそれにくらべてはるかに詳しい。ただ一つの不安は、

松江流域の棉花をうたう錢氏の詩に對して、これは直隸のことである点にあるが、この圖は錢氏のうたうところによく一致して理解を助けられるので、むしろ清代直隸における棉花の栽培や製布の工程は、江南のそれをそのままに學んだものであったことを知るとしてよいであらう。

この詩のもついま一つの性格は、清の張應昌（二七九〇—一八七四）の國朝詩鐸卷七木棉に、そこに収める十五家の詩のうちの一家一首としてこの詩が載せられていることにあらわれている。國朝詩鐸は張應昌が「三百篇の興觀羣怨の旨にもとづき、當今の世の子美（杜甫）・香山（白居易）・文昌（張籍）・仲初（王建）の詠の別集中に散見するものを集め」（咸豐七年目序）、「以て銘座の詞に充て、以て采風の備へと為し」た（自題詩）ものなのである。錢大昕の詩でこの書に収められているのはこの木棉花歌だけであるが、錢大昕の墓志銘を撰した王昶が「その詩格は白太傅（居易）・劉賓客（禹錫）の間に在り」というのを、この辺りから理解してよいであらう。しかも錢氏のこの詩はその學養のにじみ出ている言語を理解できるかぎり、他の詩人たちが勞役の苦しみを觀念的にうたったものや、類型化のきらいなしとしない人民詩のたぐいに比して、はるかに眞實の情感を寓するものであることを明らかにしたいと思う。

木棉之花古未有

木棉の花 もめん はな いにしへ いま 古 ふる は未だ有らず

流傳乃自林邑南

流傳するは りうでん すなは りんいふ みなみよ 乃ち林邑の南自りす

1

〔南史林邑國傳〕林邑國、本漢日南郡象林縣、古城襄界也、……其國……出瑇瑁古貝沈木香、古貝者樹名也、其華成時如鵝龜、抽其緒、紡之以作布、布與紵不殊、亦染成五色織、為班布。

棉花は古代にあつては中國には産しなかつたものである。木棉の樹が中國に流傳したのは林邑國の南からであつた。——と文獻に徴して錢大昕は考える。ここには南史を注したが、梁書の林邑傳にも同様の文がみえる。梁書では古貝を古貝とするが、古貝とは古貝の訛音である。第七聯の注を参照。林邑國のあつた位置はいまのヴェトナムであ

る。ここで「林邑の南」といつている「南」は脚韻なので、地理的な意味はさほどたないと考えられる。

木棉には木棉もくめん (*Ceiba pentandra* GAERTN.) と草棉 (*Gossypium herbaceum* L.) との別がある。錢大昕は古く中國に入つて來たのは木棉もくめんで、あとから來た草棉がそれを壓倒した、と考える。いましばらくその考えに沿つて注解を進めてゆくこととする。そのばあい錢氏の言うところを證するに足る文獻を見出しえないこともあり、また見出した文獻が錢氏の言うところに合わないこともおこるわけであるが、ともにそのことを明記することとしたい。

ちなみに製品である棉布が中國に入つたのはきわめて古いとされる。清の俞正燮(一七七五—一八四〇)の癸巳類稿卷十四に「木棉考」があり、史記貨殖列傳の「楊布皮革千石」の集解に引く漢書音義に「楊布は白晘也」というのによつて、これを木棉の布の文獻にみえる最初であるとする。史記索隱も漢書の師古注も、この楊布(荅布)をかならずしも木棉の布とはしないが、史記正義は「案ずるに白晘は木棉の織る所にして、中國の有に非ざる也」という。

高昌 緬甸 及南詔

高昌かうしやう 緬甸めんどん 及およ 南詔なんしやう

移來交廣 雷瓊儋

移うつ 來きた 交かう 廣くわう 雷らい 瓊けい 儋たん

..... 2

〔南史列傳第六十九夷貊下〕高昌國、…蓋車師之故地、南接河南、東近敦煌、西次龜茲、北隣敕勒、…多草木、有草、實如薔、薔中絲如纁、名曰白晘子、國人取織以為布、布甚軟白、交市用焉。〔太平御覽卷九百六十引吳錄地理志〕交趾定安縣有木縣樹、高大、實如酒杯、中有縣、如蚕之絲、又可作布、名曰縹、一名毛布。〔又引廣州記〕枝似桐、枝葉似胡桃而稍大、出交廣二州。

高昌は敦煌の西、いまの新疆省土魯番地方にあった國。緬甸はビルマ、南詔は雲南の地。林邑のほかそうした周辺の國々から、交州・廣州・雷州そして海南島の瓊州・儋州へと、移し植えられた。吳錄地理志とは晉の張勃の吳錄三十卷(唐志雜史類)である。文は後魏の賈思勰の齊民要術卷第十の非中國物産者に引くところと若干の異同がある。

ここにその原産地を、林邑につづけて高昌・緬甸・南詔というが、緬甸・南詔についてはまだ文獻を知らない。一方、高昌について引いた南史夷貊傳は「草有リ」といっており、地域的にも林邑のものと同種とはほとんど考ええない。

桐身 楓葉芙蓉蕊

どうしん ふうえふ ふうよう ずゐ
桐身 楓葉 芙蓉の蕊

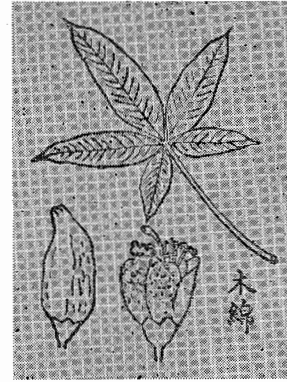
秋來 結實離相參

あきた 実を結び 離れて相參る
秋來 結實 離れて相參る

3

〔本草綱目卷三十六木部木綿集解時珍曰〕木綿有草木二種、交廣木綿、樹大如抱、其枝似桐、其葉大如胡桃葉、入秋開花、紅如山茶花、黃蕊、花片極厚、為房甚繁、短側相比、〔又〕江南淮北所種木綿、四月下種、莖弱如蔓、高者四五尺、葉有三尖、如楓葉、入秋開花、黃色、如葵花而小。〔太平御覽卷九百六十引羅浮山記〕木綿正月則花、大如芙蓉、花落結子、方生縣與葉耳、子内有縣甚白、蚕成則熟、南人以爲繅絮。〔又引廣志〕木縣樹赤華、為房甚繁、偃側相比、爲縣甚軟、出交州永昌。

ここに本草綱目の「其の枝は桐に似たり」を以て「桐身」に、また羅浮山記の「正月には則ち花さく、大いさ芙蓉の如し」を以て「芙蓉蕊」に注したのは、ともに明らかに木綿についての記述であるものを用いたので問題はないが、〔又〕として引く本草綱目は草綿についての記述である。従つてこの句の「楓葉」に注するに適切ではない。木綿の葉は前聯の注に引いた廣州記にも「胡桃の葉に似てそれよりもやや大きい」と記している。胡桃とは *Juglans regia* L. var. *sinensis* Cas. テウチグルミ（松村任三「植物名彙」漢名の部）である。以下第七聯までは木綿をうたうものとして読めるので、ここに「楓葉」というについては、木綿についてもそのような記述があつてほしいわけである。ただ木綿の葉もはなはだ楓の葉に似ていることは、商務印書館の植物學大辭典の木綿の圖によつて知ることが出来る。五片の小葉がわずかに葉柄をもつていて、それはたしかにクルミの葉にも似ているといえそうである。なおこ



木棉 (植物學大辭典)

ているが、往往四瓣のものもある。その中に絮を含んでいるのであって、花桃 *hua tao* と呼ばれる」(吉川譯)とみえ、また三原新三「棉花學」(大正九年三省堂)に「棉の花芽は植物學上苞片と稱する三個の落状機關より成る総苞によって保護せられ、…」というなど、ともに草棉についての記述ではあるが、ここに附記する。

周遭 徑尺 修數丈
しうそう けいせき
 周遭は徑尺にして 修は數丈
 非杞 非梓 非榎 楠
き へん だん
 杞に非ず 梓に非ず 榎楠に非ず

..... 4

〔本草綱目木棉集解時珍曰〕張勃吳錄所謂、交州永昌木棉樹、高過屋、有十餘年不換者、實大如盃、花中綿軟白、可爲繻絮及毛布者。〔清吳其濬植物名實圖考引嶺南雜記〕木棉樹大可合抱、高者數丈。〔國語楚語〕若杞梓皮革焉〔注〕杞梓良材也。〔司馬相如子虛賦〕其北則有陰林、其樹榎杞豫章〔注〕土積則生榎楠豫章。〔莊子山木〕其得杞梓豫章也〔疏〕杞梓豫章、皆端直好木也。〔案〕榎楠同。

「周遭」はまわりをめぐること、ここは幹のまわり。「徑尺」は直径一尺。いま本草に引く呉錄の「高さ屋を過ぐ」を以て「修數丈」に注しておくが、他に、より適切な資料があるかもしれない。吳其濬(一七八九—一八四七)は嘉道朝

こで楓とはフウであって、かえでと讀まれてはならない。遠藤嘉浩「杜牧の山行にみえる楓林」(近藤編「中國古典詩叢考」勁草書房)に詳しい。ここに廣志(晉の郭義恭の撰、亡)を引いたのは、その「房を爲ること甚だ繁く、偏側して相比ぶ」を以て「離相參」に注したものである。偏側とはせましかたむくさま。しかしこの「參」のよみかたには疑念を存する。御題棉花圖の第五圖採棉に「花が落ちて蒴が生ずるのであるが、蒴も亦花 *hua* と稱する。これは棉に特有なことである。…蒴には三個の瓣が集まつ



木棉 (植物名實圖考)

の人、嶺南雜記の著者呉震方は康熙朝の人である。第二聯の注に御覧によつて引いた呉録の文の「高大」を俞正燮が木棉考に齊民要術によつて引くところでは「高丈餘」とするが、四部叢刊景明抄本齊民要術では、この句は御覧の引くところと同じである。

木棉はりっぱな樹である。しかしそれは、あふち(杞)・あづさ(梓)・ベン(梗)・くすのき(楠)など、有用の良材とされる中國に由緒ある良木、ではない。

蠻方實此作活計

不數八蠶吳中蠶

蠻方此を實と^{ばんぼうこれ}して活計^{かつけい}を作す
數^{かず}へず八蠶^{はつせん}吳中^{ごちゆう}の蠶^{さん}

5

〔唐書地理志〕蘇州吳郡土貢、絲葛絲綿八蠶絲緋綾布。〔吳郡賦〕國稅再熟之稻、鄉貢八蠶之綿。〔案〕蠶俗繭字。南蠻の地の人々はこの木棉の樹を愛重してこの樹にたよつて生計をたてている。年に八度繭をつくる吳の地の蠶ももののかずではない。

爾雅釋木置不録

南州舊志披琅函

爾雅の釋木は置^おいて録^{ろく}さず
南州^{なんしゆう}の舊志^{きゆうし}琅函^{ろうかん}を披^{ひら}く

6

〔韋莊李氏小池亭十二韻〕家藏何所寶、清韻滿琅函。〔案〕函函本字。爾雅の釋木にはまったくかえりみられていないが、南州の舊志、たとえば呉録地理志などを文箱からとり出してみると、かえつてそこに記録がみえる。

迦羅婆劫載梵夾

からばこふ ほんけふの
迦羅婆劫 梵夾に載せたり

嘉名肇錫由瞿曇

かめい はじ たま
嘉名 肇めて錫ふは 瞿曇に由る

..... 7

〔本草綱目卷三十六木棉釋名時珍曰〕木棉有二種、似木者名古貝、似草者名古終、或作吉貝者、乃古貝之訛也、梵書謂之跋婆、又曰迦羅婆劫。〔宋史天竺國傳〕貝葉梵書一夾。〔離騷〕肇錫余以嘉名。〔涅槃經卷十七梵行品〕姓瞿曇氏、字悉達多。

迦羅婆劫という名で、この樹は佛典に載っている。してみるとこの樹がはじめによき名を與えられたのは印度においてであつた。

以上で木棉についての叙述をおわる。以下、草棉について。

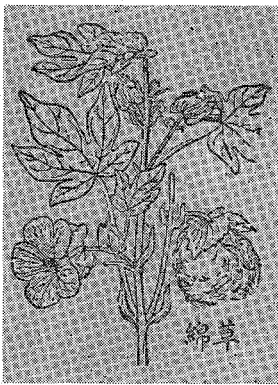
艸棉 晚出 乃居上
卑枝 弱幹 霜苞含

さうめん おく い
艸棉は 晚れ出でて 乃ち上に居る
ひしやくかんしもはう ふぐ
卑枝 弱幹 霜苞に含む

..... 8

〔本草綱目集解時珍曰〕莖弱如蔓（已見楓葉注）。

草棉は木棉よりあとから現われたのに、かえつて木棉をしのぐ勢いとなつた。しかし木棉とちがつて、か細い枝に弱よわしい幹、その苞は霜を含むかのようにまっ白である。



草棉（植物學大辭典）

古終 古貝 名少別
騷翁 辨說 徒詁誦

こしゆう こばい なすこ
古終 古貝 名少しく別つ
さうろう べんせつ
騷翁 辨說すとも 徒に詁誦

〔案〕古終古貝、已見迦羅婆劫注。〔佩文韻府引張翥詩〕吾我涉誕謾、爾汝志詒誦。

草棉は古終とよばれ、木棉は古貝とよばれる、というように古名のうえでもわずかな区別しかされていない。詩人であるわたくしなどが、草棉と木棉との區別を論じてみても、いたずらに饒舌を費すにすぎないこととなるであろう。

「騷翁」の語はほかに用例を知らないが、騷人・騷客と同じであろう。錢氏は「二十歳以後、いささか經史の學に志を立ててからは、専門の詩人にはなりたくないと思うようになった」(潛研堂詩集自序)のであるが、この詩はそれ以前の作である。かといってこれがすでに詩人の詩でないことはいうまでもない。しかも木棉には「桐身」「芙蓉の蕊」といい、草棉には「卑枝弱幹」といい、文獻と觀察にもとづいてその本質的な区分はおさえてある。

趙翼(一七二七—一八一四)の陔餘叢考卷三十に「木棉布行於宋末元初」と題する考證がある。趙翼は清朝の詩の歴史のうえでも蔣士銓・袁枚と併せて乾隆三大家の稱のある人であるが、この陔餘叢考はまた錢大昕の十駕齋養新錄に繼ぐものといえる。いまこの木棉についての考證の目的は木棉が中國に行なわれはじめた時期とその土地とを論ずるに在るが、ここに注目すべき発言がある。すなわち「今粵中の木棉樹は、其の花正紅にして、落つる時に及んでは則ち白きこと驚毳の如し、正に南史に云ふ所の吉貝樹也。但だ其の花は、祇だ茵蔯に絮す可きも、而も布に織る可らず」というのである。趙翼は知府として廣西鎮安府や廣東廣州府にいたことのある人なので、これは實見にもとづく記事にちがいない。しかも今日、カポック、すなわち木棉の果皮の内壁に生じた毛は、纖維がきわめて軽く、水をはじきやすく、彈力が強いなどから、ベッド用として重宝される一方、纖維は弱くて單獨での紡績は最近まで困難とさされていたという(平凡社世界大百科事典西川五郎「カポック」)のと、まさしく一致する。ところで趙翼はつづけて、唐書南蠻傳の「吉貝は草なり、花を緝とぎて布を作る、名づけて白氈はくでふと曰ふ」、および新唐書林邑傳の「古貝は草なり」により、南史にみえる吉貝という「樹」はこの古貝という「草」にほかならないと論じる。棉布が中國に入ったとき、それは梁の武帝の時もうあつたことが確められるのであるが、棉花がまだ中土に入っていなかったことだから、木

なのか草なのか知らぬまま、蠶の繭の綿と區別して木棉といつていたところ、たまたま南方に木棉の樹があつたため、この樹の花で織つたものと決めてしまった。しかし唐書が纂修されるころには、もう草であることがわかつていたから、木とはいわず草といったのである、という。これによるならば「桐身」「徑尺」「修數丈」の木棉の樹はまさに「木棉」であり、古終・古貝・吉貝みな草棉であることとなる。

何人分種到江左

なんびと わかう
何人か分ち種多て江左に到らしむ

花開處處臨激潭

はな しょよ ひら
花處處に開いて激潭に臨む

〔錢氏自注〕吾鄉所種、皆艸棉、沿其名曰木棉耳。〔本草綱目集解時珍曰〕…皆指似草之木棉也、此種出南番、宋末始入江南、今則徧及江北與中州矣、不蠶而綿、不麻而布、利被天下、其益大哉。

長江の下游、南岸の一带、江のみぎわにまで、いたるところ棉花が開く。草棉を移し植えて江南にまでもたらしたのは、誰なのか。その誰かについて、以下黃道婆の伝説がうたわれる。しかし錢大昕の関心は誰ということではあるまい。いつごろから中國に草棉が入って来たのかということを考える一つのてがかりを、黃道婆伝説にもとめることは無意味ではなからう。

崖州老姥年七十

がいしう らうぼ としちじふ
崖州の老姥年七十

卓椎雙髻頭髻髻

たくちゑ さうけい かいへい
卓椎雙髻頭髻髻

11

〔陶宗儀南村輟耕錄卷二十四〕國初時、有一姬名黃道婆者、自崖州來、乃教以倣造捍彈紡織之具。〔史記貨殖傳〕賈椎髻之民、富埒卓氏、俱居臨邛。

崖州は海南島の南岸、宋のときから州が置かれた。陶宗儀は元末の人なので、國初とは元初である。姥は姆に同

じ、^お嫗もまた老婦をいう。黄道婆のことはこの輟耕録よりのち、明の張鼎思の瑯琊代醉編にもみえるが、「年七十」の文は知らぬ。南越の風俗で髻のかたちが椎のようであるから椎髻とよばれるという。高い（卓）ふたつ（雙）の椎髻。しかしこの老姥の頭髮は髻とみだれている。

傳來 上世 種植法

^{でんらい、じやうせい、しゆしよくはふ}
傳來す 上世 種植の法

至今 立祠 香茅庵

^{いま、いた}
今に至るまで祠を立てて 茅庵に香す

12

〔南村輟耕録〕未幾嫗卒、莫不感恩灑泣、而共葬之、又爲立祠、歲時享之、越三十年、祠毀、鄉人趙愚軒重立、今祠復毀、無人爲之創建、道婆之名、日漸泯滅無聞矣。〔大清一統志松江府陵墓〕黄道婆祠、在上海縣西南烏泥涇上、道婆本鎮人、初淪落崖州、元元貞間、附海舶歸、閩廣多種木棉、紡織爲布、名曰吉貝、道婆最善是業、州里宗之、因教以制造捍彈紡之具、錯紗配色、綜線挈挈花之法、利被一鄉、及卒、鄉人趙如珪、立祠祀之、張之象有記。

黄道婆が上世の種植の法を伝えたという、その「上世」とはいつごろを考えているのか。趙翼が一つの推論として述べるところであるが、禹貢の揚州の「島夷卉服、厥篚織貝」に蔡沈は「今南夷木棉の精好なる者、之を吉貝と謂ふ」というので、夏のとき、織貝といったのが今の草棉布であるとすれば、三代の時すでにあったことになるという。もつとも孔傳は織貝を分けて細紵と貝とであるとし、鄭玄は錦であるとしているのであるが、ここに「上世」という錢氏もあるいは禹貢を意識しているのであらうか。

なお、黄道婆の伝説を書きとめた陶宗儀は、その祠も修復されずその伝説もいつしか亡びゆく運命にあらうとの感慨をこめているが、その豫見に反して清一統志の記述もなかなか詳しい。錢氏の詩に「至今」というのに注すべく一統志を引いた。またこの一統志になると、黄道婆を本鎮の人としていることは注意してよい。伝説は亡びるどころか、こんなところにも中華意識が頭をもたげるのであらうか。元來この土地の人であつたのが流落して崖州にいたま

でで、それが元の元貞（二二九五—）中に海路から故郷に帰ったとするのである。

烏泥涇上靈旗卷

うでいけいじやうれいきま
烏泥涇上靈旗卷き

風鬢霧髻留空龕

ふうくわんむびんくうがん
風鬢霧髻空龕に留む

13

〔南村輟耕錄〕閩廣多種木棉、紡績爲布、名曰吉貝、松江府東去五十里許、曰烏泥涇、其地土田磽瘠、民食不給、因謀樹藝、以資生業、遂覓種於彼。〔讀史方輿紀要江南松江府上海縣〕烏泥涇、縣南三十里。…元泰定初、都水監任二發、溶烏泥・大盈二河、…今東流、注於黃浦。〔清王士禎秦郵雜詩八首第三首〕靈風斜日畫旗卷。〔蘇軾洞庭春色賦〕攜佳人而往遊、勒霧鬢與風鬢。

浙江省松江府の郊外、烏泥涇のほとりにその祠はある。風に卷かれる靈旗、がらんどうの龕の中には風雨に曝された老嫗の髪の毛がまつられている。

「靈旗」は古く漢書の禮樂志の郊祀歌に「招搖靈旗」の語がみえ、招搖星を画いた旗で征伐に行こうとする國を指して祈る、その旗であるという（師古注及び王先謙補注）。ここに漁洋が露筋祠を詠んだ句を引いたのは、祠に建つ旗という語であろうと考えるからである。また漁洋の「再過露筋祠」詩の「翠羽明璫尚は儼然たり」の句には、祠堂にまつられているむすめの塑像をわたくしは思い浮べるのであるが（漢詩大系17「清詩選」一六〇ページ）、いまこの「留空龕」の語にはそういう想像を許さないものがあるように思える。

黃道婆のことは御題棉花圖（第十四圖上機）にもみえる。

昔より傳へていふ、元の時に黃道婆なる者が有つて、崖州より松江に來り織具を作つて人に教へたが巧異の點多く、製品は他處に冠たるものであったと。現在松江太倉附近ではこの人を花神廟 hua shen miao に祀つてゐるが、すなはち棉を祈る廟である。（吉川譯）

なおこの「黄道婆」に吉川博士は注して「黄は姓であって、道婆とは道教に關係ある女性を意味する」といわれる。また宋の賈似道が殺されたところが「木綿菴」であつたと同博士より示教をうけた。これを宋史本傳（卷四七五）に徵すると漳州（福建省龍溪縣）の木綿菴である。それはかならずしも黄道婆祠ではないであらうが、南宋の末には福建省南部にすでに木綿の栽植が行われていた證の一つとなるであらう。

爾來傳授五百載

爾來傳授すること 五百載

鄉邸男婦人人語

鄉邸の男婦 人人に語んず

錢大昕がこの詩を作つたのは乾隆十五年（二七五〇）以前と考えうることは題下の注に述べた。黄道婆が烏泥涇上來たのを仮りに元の元貞中（二二九五—六）とすれば、四百五十餘年となる。「語」とはおぼえ、そして習熟すること。

「歴史研究」一九五七年第四期にみえる史宏達氏の考核によれば、棉花が長江流域にひろく栽植されるようになったのは十三世紀のときとし、紡織の技術も同時に中國の内地に入つたものとしている。その資料とするのは資治通鑑卷一五九「木棉江南多有之」に附された胡三省の注である。またこれは南から入つた木棉であつて、別に西域から東來したものも十三世紀に渭水の流域にやはり紡織技術とともに入つていたことを、孟祺の農桑輯要を引いて述べる。草棉の流入経路も一つではなかつたわけである。また南宋という時代の必然性として軍用としての棉布の需用が出たことが、このとき中國内地における植栽製布を促進せしめた大きな要因であること、放翁の詩にみえる、とこれも吉川善之博士の示教を受けているが、これを劍南詩稿に徴しつつまだ見出しえないでいる。

弓彈桿軋良自苦

弓もて彈ち桿もて軋る良に自ら苦しむ

如食蓼葉蟲知甘

蓼葉を食ふ蟲の甘きを知るが如し

〔明宋應星天工開物布衣〕凡棉春種秋花、花先綻者、逐日摘取、取不一時、其花粘于子腹、登赴車而分之、去子取花、懸弓彈花（爲挾纈溫衾襖者、就此止功）、彈後以木板擦成長條、以登紡車、引緒糾成紗縷、然後繞鑿牽經就織。〔御題棉花圖〕淨花曝令極乾、曲木爲弓彈之、弓長四尺許、上彎環而下短勁、蠟絲爲弦、椎弦以合棉、聲綢綢然與鄰春相應。〔又〕軋車之制、爲鐵木二軸、上下疊置之、中留少鐸、上以轂引鐵、下以鈞持木、左右旋轉、餞棉於鐸中、則核左落而棉右出、有核曰子花、核去曰瓢花、瓢之精者曰淨花。〔王粲七哀詩〕蓼蟲不知辛。

「弓彈」は、すでに種子を取り去った棉花を弓を張つてうちほぐす作業。「桿軋」は「弓彈」よりまえの作業で、摘み取つて來た棉花には種子がくつついているから、それを棉線車（軋車）にかけて分けるのをいう。みな注に引いた天工開物の記述にみえ、いま藪内清編「天工開物の研究」（昭和二十八年恒星社厚生閣）の譯注篇による。御題棉花圖も注に「又」として引くのが第八圖の説明（軋核）であり、はじめの彈華の文は第九圖の説明である。さきに引いた吉川譚があるがここには略す。

弓彈・桿軋、それにつづいては注に引く天工開物にみえるとおり、擦條・紡縷の工程がある。弓で打ちほぐしたわたは、板でこすつて長い紐状とし、それを紡車にかける。緒を引つぱり撚りをかけて絲とする。その後で鑿にまいて經糸をそろえ、織りにかける、のである（藪内譯による）。あいつぐ苦しい労働、それなのに農民は、蓼くう虫の辛を知らぬがごとくに、その労働にいそむ。

吾生雖無田負郭

吾が生田の郭を負ふ無しと雖も

田家月令曾研覃

田家の月令曾て研覃す

16

〔潛研堂文集卷五十先考小山府君行述〕家故無負郭田、大父以授徒餬口、泊府君弱冠後、亦出授徒、而吾母沈恭人、躬紡織佐之。〔又亡妻王恭人行述〕予家貧無負郭田、或謂骨相寒陋、雖早慧不能得功名。〔案〕竹汀父譚桂發、

乾隆四十年卒、年七十九、妻王氏諱順瑛、乾隆三十二年卒、年四十。〔潛研堂詩集卷一田家雜詩五首第三首〕小屋纔三椽、編茅以蓋之、老農八九家、卜鄰亦于茲、門戶同所向、酒食常分貽、雞犬各相識、棲宿無疑猜、禾黍既登場、相見多好懷、既念手足勤、還感雨露滋、有年君莫恃、當思無年時。〔又卷五初春懷鄉樂詠四首第一首〕郭澤塘南顧浦西、吾宗四世卜幽棲、肥田屋後秧針細、漲水門前蟹齋、市小數家成一闕、酒醕有戶借偏提、官租輸了無它事、饋歲紛紛宮榼攜。〔案〕此庚辰〔乾隆三十五年〕初春作、前年巳卯冬、祖父諱王炯、終於里第、年九十二。〔史記蘇秦傳〕使吾有洛陽負郭田二頃、吾豈能佩六國相印乎。〔孔安國古文尚書序〕研精覃思〔釋文〕覃深也。

これまで棉花の中國への流伝に對する強い關心にもとづいてうたつて來た詩は、前聯を轉機にし、ここに至つて錢氏自らが登場し、以下棉花の植栽から製布に至る農民の労苦を述べること宣言しようとする。「わたしは生れつき城郭に接した肥沃の田地などもたないが、農家の年間を通じての生活についてはかねがね深く思いを致している。」注に引いた父及び妻の行述はこの詩よりそれぞれ二十年前後のもの作であるが、「負郭の田無し」の語を好んで使っていることがわかる。錢大昕は質素な讀書人の家庭に育っている。その家は地主であつたのであろうが、彼の幼時の生活はなかなか苦しかったらしい。その父祖については第31聯の注を参照。錢氏の田家雜詩はこれも早年の作に屬するが、潛研堂詩集を通じての佳什に入るかと思う。沈德潛も七子詩選の辛楣吟藁のはじめにこの詩を収めている。七子詩選と錢氏との關係については近藤「錢大昕の文學」〔東京支那學報7〕に詳しい。田家雜詩は王孟以來詩人の集に多く、時には題詠的な傾向を伴いかねないのであるが、錢氏においては「田家の月令」に「研覃」する誠實さがあふれていること、以下この木棉歌を他人のそれに比較して指摘できるのに等しい。

四坐 勿誼聽賤子

試為具述忘愚惑

しづかまびす 四坐 誼しくする勿れ 聽け 賤子が

こころ ため つぎの ぐかん わす 誠みに為に具に述べ 愚惑を忘るるを

〔鮑照東武吟〕主人且勿誼、賤子歌一言〔注〕向日、賤子、人之謙稱。

「みなさん、お静かに。わたしが愚陋をも顧みず、つぶさに物語りするのをお聴きください」。歌行体の詩であるから、こういうかたちでの詩人の登場にはいささかの不自然さもない。張應昌の國朝詩鐸に収めるこの詩にはこの一聯がみえない。張氏の編は「聞者警戒するに足る」ことを望み、「以て采風の備えと為す」ものなので〔國朝詩鐸自題〕、この聯などは冗語として刪去したのであらうか。

嚮城土燥不宜稻

嚮城は土燥きて稻に宜しからず

稻田十厘得二三

稻田十に厘かに二三を得るのみ

18

〔大清一統志江蘇省太倉州建置沿革〕嘉定縣漢婁縣地、梁信義縣、隋唐崑山縣嚮城鄉、宋嘉定十年折置嘉定縣。〔又古蹟〕嚮城在嘉定縣南門外、唐有嚮城鄉。〔又太倉州土產〕苧布、黃草布、草履、棉花、大紅布、崇明大布。

嘉定の錢大昕。よつて嚮城とは彼の郷里を雅名をもつてよんだのである。またこの一語も、以下の叙述が錢氏その人の眼に親しく寫つた情景であることを、読者に強く印象づける効果をもっている。それを錢氏みずからは恐らく意識していないであらうが、たとえば後にかかげる錢載の「木棉嘆」の類と、本質的に辨別し得る要素の一つが、この辺りにもあるのではないかと考える。

三月才過微雨潤

三月才めて過ぎ微雨潤はす

木香花下香醃醃

木香花下香醃醃

19

〔錢氏自注〕木香花開、種花之候。〔秘傳花鏡卷四木香花〕木香一名錦棚兒、…四月初開花、每穎二蕊、極其香甜可愛者、是紫心小白花、若黃花則不香、〔案〕植物名實圖考引作每穎三蕊。

四月の声をきくとともに、膏澤のうるおいもあり、白い花をつけた、もっこうばらの樹下に芳香のただようころ。

農夫 走尋 官曆日

のうふはし 農夫走つて くわんれき 官曆を尋ぬる日

翻閱 敗壁 祛白蟬

はいへき 敗壁に ほんえろ 翻閱して はくたん 白蟬を はら 祛ふ

〔釋溥洽詩〕 篋書芸消生白蟬。

「官曆」は政府が頒布する曆。

「曆」の字、潜研堂詩集で「歴」としているのは、乾隆帝の諱、弘曆を避けたもの

なのでいま改めた。「翻閱」は書物をひらいて讀むこと。「敗壁」は隠棲する人または寒貧な讀書人の家をいう。白

蟬の蟬は蠹魚。ここは音タン、徒含切。播種には曆がある。古代中國において曆を授けること、授時は天子の重大な

務めであったのも農事に規準を示すためである。この聯の意は未詳。播種の季節が來て、日どりを問われた地主の家

では、敗壁のもとに蠹魚をはらつて官曆を翻閱する、ということであらうか。

詰朝 相戒 種花去

きつてう 詰朝 あひまし 相戒めて はな 花を う 種々に去く

蓬頭 散髮 除檻彰

ほうとう 蓬頭 さんぱつらん 散髮 のぞ 檻彰を除く

〔御題棉花圖〕 種選青黒核、冬月収而曝之、清明後、淘取堅實者、沃以沸湯、俟其冷、和以紫灰、種之宜夾沙之士、種在穀雨前者、為植棉、過穀雨為晚棉。〔左傳襄公十四年〕 詰朝之事〔注〕 詰朝、明旦。

曆を案じて、翌朝はいよいよ棉花の種を播きに出かけるのだとなると、明日からつづく労働にそなえて髪を洗い、

明日着て出かける野ら着も新調のものとりかえる。―そういうことの行われたという文献を知らないので不安である

が、この句はそうように讀める。「蓬頭散髮」はさんばら髪。隠者のなりふりかまわぬ姿などあらわすが、ここに

は当てはまらない。「檻彰」はぼろぼろになった、衣（襪）としたぎ（彰）。疊韻の語である。御題棉花圖にいう清明

は陽曆の四月五日または六日、穀雨は四月二十日または二十一日。

從朝至晡不得息

あさよ 朝從り晡に至るまで 息むことを得ず

汗出浹背流如泔

あせい 汗出でて背に浹れ 流れて泔の如し

〔蘇軾鳳翔八觀東湖詩〕有山禿如赭、有水濁如泔。

朝から夕までひとやすみもできず、汗はあふれ出て背をつたい、こめのときしるのように流れる。「晡」は申時、

午後四時。

東臯幾日生意早

とうかういくにち 東臯幾日か 生意早く

新芽迸土抽瑤簪

しんがつち ほとばし えうしん 新芽土より迸り 瑤簪を抽んず

〔陶潛歸去來辭〕登東臯以舒嘯。

〔溫庭筠過華清宮詩〕瑤簪遺翡翠、霜杖駐驂驪。

東のおかには幾日もせぬうちに早くも生氣がうごめき、やがて玉のかんざしが土中からぬきん出て來たかのように新芽がかおを出す。

火雲觸熱青笠覆

くわうん しよくねつ せいりふ 火雲 觸熱 青笠もて覆ひ

艸根細斲長鉏鏃

さうこん さいちやく ちようしよ 艸根 細斲 長鉏もて鏃く

〔御題棉花圖〕時維夏至、千鋤畢興、一月三耘、七耘而花繁茸細。〔杜甫三川觀水漲詩〕火雲無時出、飛雷常在目。

〔又貽華陽柳少府詩〕自非曉相訪、觸熱生病根。〔殷文圭詩〕青笠漁兒筒釣沒、蓓衣菱女畫桡輕。

注に引く御題棉花圖は第三圖耘畦の一部である。この説明文をいいますこし多く吉川譯によってかかげておく。

苗の間隔が密であれば刈るがよく、又苗の長いものは鋤き去るがよい。古法では『一步の間に二つの苗を留めよ』とある。これにあくまで拘泥するのは不可であるが、要は株間がなるだけ空くことを希望するに外ならぬ。夏至ともなればあらん限りの鋤が働くのであって、一月三度の割合で鋤く。七度鋤けば、花繁く茸も細い。…

「火雲」は夏雲。「觸熱」は暑氣あたり。「鉏」はくわできりとる動作。「鉏」は立つて田の草を刈るのに用いる農具。

向午 不憚 日杲杲
きやうこ はばか
 向午 憚らず 日の杲杲たるを
りやうしん とき
 凌晨 時聽 鐘 鎗 鎗
かね あんあん
 凌晨 時に聽く 鐘の鎗鎗たるを

25

〔御題棉花圖〕苗高一二尺、視中莖之翹出者、摘去其尖、又曰打心、…摘時宜晴忌雨、趁事多在三伏時、則炎風畏景、青裊縞袂、相率作勞、視南中之脩桑摘茗、勤殆過之。〔詩衛風伯兮〕其雨其雨、杲杲出日。〔白居易宿西林寺詩〕凌晨清淨與僧期。〔蘇軾東湖詩〕暮歸還倒載、鐘鼓已鎗鎗。

御題棉花圖は第四圖摘尖。ここにも吉川譯をかかげる。

苗の高さが一、二尺ともなれば、中央の莖の抽き出たものを選んでその尖端を摘み取る。この作業は打心 da shin とも呼ばれる。かくして枝を皆横へ延ばさすのであるが、横の枝も一尺五寸以上のものはやはり尖端を取り去って、互に摩擦しないやうにする。かくすれば花繁く萌も充實する。萌の数は多いもので一株に三十ばかり、極少いもので十五、六である。摘む日は晴を宜しとし雨を忌む。その繁忙期は大抵三伏の頃であって、その時には炎風烈日の下、青き裙はかましろ、縞き袂の女たちが相率ゐて勞働に服するのであって、南方の桑を處理し茶を摘むに比較して、勞苦は更に甚しい。萬一時を失して秋に入り、時期が遅くなれば、たとひ摘んでも再び枝を生じない。(訳は

第四圖説明全文)

「向午」は俗語的ないかたで正午。しかしより嚴密には「向晚」「向晨」の語も同様に「向」はそれになんなんとする。まひるの日ざしがガラガラと照りつけるのにもひるまず。「凌晨」はあかつきをしのいで、すなわち早朝から行動をおこすこと。「餼餉」はひくくてとおるこえ(説文)。まだ明けやらぬうちから畑へ出かける、ちやうどそのとき曉を告げる鐘の音がひびきたる。

饗門 稗子 攜酒榼

門に饗する稗子 酒榼を攜へ

饗餉 小婦 簪宜剪

餉を饗する小婦 宜剪を簪す

26

〔杜甫秦州雜詩〕應門亦有兒。〔詩幽風七月〕同我婦子、饗彼南畝〔傳〕饗饋也〔疏〕饗饋釋詁文、孫炎曰、饗野之餉。〔本草綱目卷十六草部萱草釋名〕忘憂、療愁、丹棘、鹿葱、鹿劍、妓女、宜男、〔時珍曰〕萱本作諼、諼忘也、詩云、焉得諼草、言樹之背、謂憂思不能自遣、故欲樹此草玩味以忘憂也、周處風土記云、懷妊婦人佩其花則生男、故名宜男。

「饗」は「應」と通用する字。「應門稗子」とは來客のとりつぎをする子ども、ここはかし一日の野らしごとを終えて歸ってくる人を、兒童たちが出迎えて、酒食の用意をととのえることか。「榼」は酒だる。これと對句でうたわれているのは、野らへの辨當運びのさま。それは年若い婦人たち、髪には萱草を挿している。萱草を挿すことは憂を忘れるの意にとるのであろうか。妊婦が佩びれば男子を生むという、周處の風土記の記事を併せて、注に本草書を引いたが、それは宜男の名字を解くためのものである。本草の引く詩は衛風伯兮の篇。

嗟爾婦子大作苦

嗟爾婦子大いに苦を作す

面目黧黑中心慚

面目黧黑中心に慚づ

27

〔戰國策秦策 鮑本卷第三惠文君〕形容枯槁、面目黧黑、狀有愧色、〔案〕姚本黧作皴、愧作歸。

婦女子の勞苦は辨當運びの忙しさなどではない。のち第33聯に注する採棉の作業が重い。たとえ辨當運びだけでも夏の太陽に焼けて顔はまっ黒。労働にうちこんでいつこう氣にしていなと見えるけれども、ほんとうは内心きはずかしく思っている女ごころを、年若い詩人はみぬいている。

去年種花花草事歎

きよねんはなをうくわじすくなく
去年花を種ゑて花草事歎く

家中積儲無一顧

かちゆうせきちよいつたんな
家中積儲一顧無し

28

〔御題棉花圖〕棉花即知是棉、産棉之地皆然、猶之洛陽人稱花、即是牡丹、是可以觀所向矣。〔廣韻〕顧大畏、可受一石。〔潛研堂詩集卷二竹枝詞和王鳳喈韻六十首自注〕邑人稱木棉花、止稱花者、猶洛陽之牡丹也。

御題棉花圖は第十四圖上機。さきに引いた花神廟のことにつづく文である。「花」とさえいえばそれが棉花を意味することは、棉花を産する土地に共通する現象で、ちやうど洛陽の人が花といえば牡丹を意味しているのと同じであり、まさにその風俗をうかがい知るに足る、といっている。ところで、その「花」の收穫が去年はまるで足りなくて、かめ一杯のたくわえさえ農家にはのこらなかつた。しかし――

今年天氣晴更好

こんねんてんきはさらによ
今年天氣晴れて更に好く

十日一雨波瀾涵

とせかひと
十日に一たび雨ふつて波瀾涵

29

〔御題棉花圖〕種棉必先鑿井、一井可溉四十畝、種越旬日、萌乃畢達、農民仰占陰晴、俯瞰滲濕、引水分流、自近徹遠、杜甫詩云、農務村村急、春流岸岸深、情景略似。〔柳貫過大野澤詩〕渟涵就深廣、蟠際渺西東。

棉を植えるには灌漑が大切であることを御題棉花圖も第二圖に述べている。晴れてしかも十日にいちどのほどよい

雨。「淳涵」は水がとどまりひたすこと。さて、今年は天気もよくて、おしめりもいいぐわい、農民のみいりがよい、となるとそれをねらうものがある。

里巫 釀 錢 賽 邨 社

里巫 錢を釀して邨社に賽せしめ

社翁 社母 醉 且 酣

社翁 社母 醉ひ且つ酣しむ

30

〔佩文韻府拾遺引提要録〕 社公社母、不食舊水、故社日有雨、謂之社翁雨。

村社の巫は農民から錢をあつめて村のやしろに寄付させる。その錢で酒を買い、男の神も女の神も酔っぱらう。「賽」は神から受けた福に報いて神をまつること。「社翁社母」は社の神様であるが、神様を演出する巫を指すところがおもしろい。

巫言 祀 神 神 不 怒

巫は言ふ 神を祀れば 神怒らず

福 汝 祐 汝 非 戲 譚

汝に福し 汝を祐く 戲譚に非ずと

31

巫のことば——。「神さまをおまつりしておけば、神さまはお怒りにならない。お怒りにならないどころか、おまえさんに福をさすけられ、おたすけになる。いやこれは正真正銘、うそいつわりのないはなしですよ。」

ここ二聯四句、これは鋭い批判である。さきに黄道婆のことをうたうにも、そのうたいぶりの中にそれを史實としてはすこしも信じてはいないことを、こころある讀者には読みとれるようにうたい成していた錢大昕であるが、ここに至つては、淫祀邪祀にこもる巫への批判を直裁的に、しかしユーモラスにうたう。清朝の學風の典型をなす人である錢大昕が、弱年にあつて里巫のいつわりをあばくのはむしろ當然と思われるかもしれないが、こういうかたちでの合理主義の精神のあらわれが、この時代の他の學人の詩文に果して見出し易いかどうか、わたくしには疑問である。

いっぽう淫祀邪教はもとより、およそ佛老二氏の學を信じないというのが、錢氏父祖よりの家風であつた。錢大昕が書いた「先考贈中憲大夫府君家傳」に「未だ嘗て佛を拜せず、尤も巫鬼禮穢を喜ばず、易簣の日、遺誠して佛事をなすことなからしめたり」ということなど、拙稿「錢大昕の文學」(前掲)に詳しい。また七十三歳の元日を迎えた錢大昕が「生來強項の骨、肯へて瞿曇を拜せず」とうたうこと、吉川博士の人間詩話その八十九(吉川幸次郎全集第一卷)にみえる。瞿曇とは釋尊である。「清詩選」錢大昕に選んだ「讀漢書」「丁巳人日七十生辰漫成」いずれも虚妄を排する見識があらわれている。段玉裁も潛研堂文集の序を書いて、

若先生、于儒者應有之藝、無弗習無弗精、其學固一軌于正、不參以老佛功利之言

「先生は學者たるものの當然たしなむべき學藝にはみな習熟し精通しておられるが、その學問は正しい軌道に確實のつていて、榮達利得を説く老佛の言を混えることなどはなかった」といつている。

三秋 轉眼 西風緊

捉花 處處 爭搜探

三秋 眼を轉ずれば 西風緊しく
捉花 處處 争つて 搜探す

〔御題棉花圖〕桃裂絮見、為棉熟、隨時采之、此枝已絮、彼枝猶花、相錯如錦。

「三秋」は秋三か月、舊曆七・八・九月。「轉眼」とはみるまに。「西風」は秋風。「緊」は急なこと。「捉花」は採棉のこと、次聯の注を参照。「爭搜探」に注すべく御題棉花圖(第五圖摘採)の文を引いた。熟したものを選んで随時に採集せねばならぬのであるから、これで「搜探」の語が解せる。

提囊 花鈴 大于 繭

腰繫 圓篋 攜荆籃

提囊の花鈴は 繭よりも大きく
腰に圓篋を繫け 荆籃を攜ふ

〔潛研堂詩集卷二竹枝詞和王鳳喈韻六十首〕 朶朶提囊看似朶〔自注〕花房曰花鈴、花大者曰提囊、收花謂之提花。
 〔御題棉花圖〕 自八月後、婦子日有采摘、盈筐橫枉、與南畝之饁相望。〔楚辭九嘆注〕 方為筐、圓為簍。
 花鈴の大きいものは朶よりも大きい。腰には竹で編んだまるいかごをぶらさげ、手には手さげかごを持つ。棉花圖
 〔第五圖〕に畫かれている婦女子の姿に「圓簍」と「荆籃」であろうと思えるものがそれぞれみえる。

不辭采擷指爪禿 さいけつ しめづ さいけつして指爪の禿するを辭せず

十五五 頰肩擔 じふしよご かな 十五五 肩を頰くして擔ふ 34

〔宋之問秋蓮賦〕 芳心未成、採擷都盡。〔元好問續小娘歌〕 吳兒沿路唱歌行、十五五和歌聲。〔詩周南汝墳〕 魴魚頰尾〔傳〕頰赤也。

「采擷」はつみとること。「十五五」とはあちらに一組、こちらに一組とつらなつて。

歸來茅舍夕陽暮 かへきた ばうしやせきやうく 歸り來れば茅舍夕陽暮れ

少長列坐齊羅聃 せうぢやうれつざ ひとし 少長列坐し齊く羅聃 35

〔王羲之蘭亭序〕 羣賢畢至、少長咸集。

「齊羅聃」は未詳。「聃」は廣韻に「耳漫無輪、又老子名」とみえるが、このままでは読めそうにない。

一日の收穫を終えて歸ってくるころ、かやぶきの田家はたそがれにつつまれている。その家の中ではこれから家族が團欒の會食がは



御題棉花圖 採棉

じまる。年少のもの年長のもの、みな並び坐す。

園蔬 鉅釘 剝菱茨

あんそ 園蔬 とうていりようけんさ 鉅釘 菱茨を剝く

水族 瑣碎 持蠃蚶

すゐぞく 水族 ささい 瑣碎 らんかん 蠃蚶を持す

〔爾雅釋魚〕蠃小者蚶。

〔案〕蚶同蚶。

〔爾雅釋魚〕魁陸〔注〕本草云魁狀如海蛤、圓而厚、外有理縱橫、即今之蚶

也〔疏〕案字書云、蚶蛤也、出會稽可食、是也。

「園蔬」は野菜。

「鉅釘」とはありあまるまでに食物が並べられること。「菱茨」はひしとおにばす。いづれもその實を食用にする。「水族」は魚介の類。野菜の類は食べきれぬほどになり、菱や茨の實もさかれる。魚介の類は

いささかおそまつで、になとあかがいとでがまんする。

國朝詩鐸に引くところでは、この兩句が無い。さきの第十七の一聯二句を飲むのと、この一聯を飲むのが、異同のすべてである。この一聯を飲むのは、あるいは誤説か。前聯と併せて四句は採棉の作業にいそむ日々、一日の労働を終えての夕べのいこいをうたうものとしてよめる。

紅蓮 飯熟 出破甑

こうれん 紅蓮 めしじゆく の飯は熟して はさう 破甑より出し

菊花 釀美 開新埧

きくわ 菊花 さむ の釀は美しくして しんかん 新埧を開く

〔本草綱目卷二十三穀部黍〕丹黍米〔瑞曰〕浙人呼為紅蓮米、江南多白黍、間有紅者、呼為赤鰕米、〔宗奭曰〕丹黍

皮赤、其米黃、惟可為糜、不堪為飯、黏着難解。〔荆楚歲時記〕九月九日、佩茱萸、食蓬耳、飲菊花酒、今人長壽。

〔廣韻〕埧埧。

割れたかまどからおろされてくる紅蓮米のごはんはおいしそうにたきあがっている。つばからいしがたとり出さ

れた菊花酒はみごとにかもされている。本草の「宗奭曰」に、丹黍米すなわち紅蓮米は、かゆにはできるけれども、めしにはしにくい、とみえる。しかしそれも粘着性の強いためだという。「釀」はかもすことであるが、ここは酒そのもの。菊花酒の封がきられるのであるから、九月九日重陽の佳節が来たのであろう。

拍手頓足紛襍沓 手を拍ち足を頓して紛として襍沓す

太平有象樂且湛 太平象有り樂しみ且た湛む

..... 38

〔唐書牛僧孺傳〕宰相曰、公等有意於太平乎、何道以致之、僧孺曰、……然太平亦無象、今雖未及至盛、亦足為至矣、而更求太平非臣所及。〔詩小雅鹿鳴〕和樂且湛〔傳〕湛樂之久。

重陽節を迎えるころには、採棉の作業がほとんど終るのであろう。重陽の宴のにぎやかさ——、太平のすがたはそれを具象としてみるわけにはゆかぬと言ったものもいるが、この田家のうたげをみよ。遠く周の世の主君の招宴に「和樂して且つ湛」んだ群臣のさまもかくやとばかり、うたいおどる農民のこよいのうたげに、太平のすがたは頭現しているではないか。

しかしそれもほとんどつかのまの夢。一夜明ければ……。

朝來忽訝聲剝啄 朝來忽ち訝る聲剝啄

市牙估客頻停驂 市牙估客頻に驂を停む

..... 39

〔御題棉花圖〕每當新棉入市、遠商翕集、肩摩踵錯、居積者列肆以斂之、懋遷者牽車以赴之、村落趁虛之人、莫不負挈紛如、售錢繒、易鹽米、樂利匪獨在三農也、棉有定價、不視豐歉為增減、惟於斤衡論輕重、凡物十六兩為一斤、棉則以二十兩為斤、豐收加重、至二十四兩、仍二十兩之直也、轉鬻之小販、則斤循十六兩、而取贏焉。〔韓愈剝啄行〕

剝剝啄啄、有客至門。〔盧綸晚次鄂州詩〕估客晝眠知浪靜、舟人夜語覺潮生。

朝からトントンと門をたたく音がする。秋の收穫を終えて一同よろこびのうたげを楽しんだばかりなのに、というきもちが「忽」であり、かような田家に訪う客があらうともおもえぬのに、と「訝」るのである。「市牙」は仲買人。御題棉花圖（第七圖）にも、仲買の小商人が、二十両で一斤とする棉を、通常の十六兩一斤で數えて利益を取るといつている。「估客」は商人、とくに行商をいうか。「驂」は三頭だての馬車。

詩はここからまた一轉して、夢も希望も、無残にひき裂かれる農民の悲哀をうたう。

得錢 梱載 渡江 去

錢を得 梱載して 江を渡つて 去く

吾廬 依舊 空沈沈

吾が廬は 舊に依りて 空しく沈沈

40

〔錢氏自注〕長含切、〔案〕〔錢大昕十駕齋養新錄卷五舌音類隔之說不可信〕古無舌頭舌上之分、知徹澄三母、以今音讀之、與照穿牀無別也、求之古音、則與端透定無異、〔又〕古讀沈如潭、史記陳涉世家、夥頤、涉之為主、沈沈者、應劭曰、沈沈宮室深邃之貌、沈音長含反、與潭同音、韓退之詩、潭潭府中居、即沈沈也。

〔御題棉花圖〕自種迄収、田功畢而人事起矣、棉貴純白、土黃色者、亦可織而直賤、水滌者惟供雜用、爰類擇之、以分差等、曝布之、以資久貯、時當秋穫、場圃畢登、野則京坻盈望、戸則葦箔紛羅、擘絮如雲、堆光若雪、…。

「得錢」は農民のことではない。すぐたんまり現金を手にするのは仲買人であろう。「梱載」するのが商人たち。彼らがたち去ったあとのがらんだらなくなったしづが家のむなしさ。その空虚の悲哀を對比によって示すべく、ここに御題棉花圖（第六圖採嚶）を引いた。さらに吉川譯についてみてみよう。

種時から收穫までで農作は終了するのであって、そこで人工の作業が開始される。綿は純白のものを貴しとし、土黄色のものも織るに堪へるが價は安い。水に浸ったものは雜用に供するに過ぎぬ。さてこれを類別して差等を

つけ、乾燥して貯藏に備へるのであるが、時恰も秋の取入時であり、田も畑も皆稔るころほひである。野外では大岡小岡の如く一面に積み上げ、家の中では葦の窠が散亂して、開いた架は雲の如く、盛り上げられたる光は雪にもまがふ。

これにつづいてこの注には引くのを略した部分にいう。

蓋しこの時に至つて、防寒の計成つて越年に關する憂は無い。農家の占では十月朔日が晴であれば綿の安い兆と
いう。されば俗に『綿を賣る女房、心配は冬の朝』の諺があるが、實驗するにまことに然り。

十月からは冬である。しかし家の中までところせましと積みあげられた綿で、冬を迎える憂いは無い、と直隸總督が天子の玉座に獻ずる棉花圖にはいう。もつともそれも、綿の價下りを心配する農家の主婦の、はかない占いがよく當ると記して、たとえうずたかく積まれた綿の中に坐していても決して手放しに安堵してはおれない農民の實情を、ちよつびりのぞかせていると、よみとるべきであらう。

なおここで「人工の作業」のちにできる「綿」を意味するばあいが出てきた。御題棉花圖の原文でも區別せずみな「棉」の字を用いているが、本稿においては、植物を意味するとき「棉」を、棉の生産物を意味するとき「綿」を用いておく。

次に「沈沈」に錢氏みずから注して「長舍切」というのは、これを音チンすなわち侵韻によんでは押韻しないのであるから、音タンで覃韻であることに注意せねばならぬことはもとよりであるが、錢氏がここに「長舍切」という反切を記したのには意味がある。それは十駕齋養新錄にみえる「舌音類隔の説は信ず可からず」という、清朝における古紐研究史のうえに有名な錢氏の學説を背景にもつてあらうからである。その説は、上古においては舌頭音と舌上音との區別はなかつたというもので、知^ち徹^て澄^{てい}の^にような舌上音は、上古においてはみな端^{たん}透^{てう}定^{てい}の^にような標準的な舌音、すなわち舌頭音であつたと考えるものである。「古^{いにしへ}に舌頭・舌上の分無し。知・徹・澄三母、…之を

古音に求むれば、則ち端・透・定と異なる無し」というのがそれである。つまり上古において舌頭音であったものが、次に續く介母の作用によって、あるものは舌頭音に止り、あるものは舌上音に變化した。そしてまたあるものはさらに舌上音を通過して正齒音まで變化したのである、と説明される。「知・徹・澄の三母は、今音を以て之を讀めば、照・穿・牀と別無き也」というのがそれである。つまり、中古の舌上音の文字が、現代音では照・穿・牀・*zh, ch, sh* となつてゐるものがあることをいう。清濁（鼻音）についてもいえるのであるが、錢氏の記述に合せていまは省く。ところでいま「沈」[chén]は中古音/*diem* であり。「潭」[tán]は中古音/*ma/p* である。「沈」を「長/*ǎi*・含/*ma*」の反」でよめば、中古音/*ma/p* となるが、上古に遡れば、「沈」も「潭」もともに/*den* であつたわけである。

右の解説および中古音・上古音の標記は畏友頼惟勤教授の著「離騷」注（二九五八年江南書院）に負うものである。錢大昕の引く韓愈の詩句は「符書を城南に讀む」と題する古體の詩（集卷六）にみえる。なお附言すれば、この詩を作つた時、まだ弱年の錢大昕に、今日われわれが十駕齋養新錄にみるまでの體系をもつた古紐の學説が確立してゐたといふのではもとよりない。しかしおよそこの詩にあらわれている學殖は、のちの錢大昕の學問を培うに足る基盤が、當時すでに築かれていたことを物語つてゐる。反切を示す自注のもつ背景を、軽々に看過してはならない。

蚤花 捉後 花漸少
 蚤花 捉みし後 花漸く少く
 霜黄 滿地 羣兒擣
 霜黄 地に滿ちて 羣兒擣る

41

〔御題棉花圖〕霜後葉乾、采摘所不及者、黏枝墜隴、是為臍棉、至十月朔、則任人拾取無禁。

花桃が裂けて絮があらわれると、棉が熟したのであつて、随時これを採集することは、さき（第32聯）に引いた御題棉花圖の説明にみえた。「蚤花」とは早くできた花桃、それをつんだあと、花は次第に少くなる。やがて「霜がおり

て葉が乾き、採集するを得なかったものは、枝に附着したまま甕に墜ちる」(吉川譯。これを「臙棉」(あまりわた)とよび、十月一日からは誰が拾いとってもかまわない風習であるという。それは直隸の風俗。いま錢大昕の故郷、嘉定縣のあたりでも子どもたちが拾いに出る。「霜黃」というのは霜に逢い黄色くなった花桃のことであろう。さきに「土黄色のものも織るには堪へるが價は安い」とあった(第40聯に引く棉花圖)。

賣錫 老翁 打鼓過

傾筐 換取 目眈眈

錫を賣る老翁 鼓を打ちて過ぐ
筐を傾け換取して 目は眈眈

錫うりのじいさんが、太鼓をうちながらやっていると、子どもたちは目の色を變え、拾い集めておいた黄色いあまりわたをもち出す。そして竹かごの底をはたいて、錫と交換してもらう。——前聯と併せてこの四句には無心の子どもの姿がほほえましくうたわれ、このあと讀むさえ息苦しいばかりの終結へと一氣に趨く詩の流れの中にあつて、せめてもの救いとなつてゐる。

「錫」は説文によれば、餼(おこし)を和して作つたあめ。餼を和してなくて弱いあめが「飴」。説文の篆文が各本「錫」とあつて「易の聲」とするのを、段玉裁は「錫」に改める。「眈」は説文によれば、近きを視つて遠きを志すことであるが、ここは「虎視眈眈」(易の頤の卦の六四の爻辭)の「眈眈」であろう。釋文に「眈眈は虎の下視する貌」。

促織 初鳴 河射角

篝鐙 一縷 光猶舛

促織初めて鳴いて 河角を射る
篝鐙一縷 光猶は舛ふ

〔文選卷二十九雜詩上古詩十九首〕明月皎夜光、促織鳴東壁、〔注〕春秋考異郵曰、立秋趣織鳴、宋均曰、趣織蟋蟀也、立秋女功急、故趣之、禮記曰、季夏、蟋蟀在壁。〔古詩源卷一四民月令引農語二則〕三月昏、參星夕、杏花盛、桑

ろうから、その天象はいまよりおおむね二〇〇年前のもの、従ってほとんど二時間近くも現在の天象より早かったと考えてよい。現在の十月一日二十時の空は同日六時に見られたわけである。あるいは同じ二十時においてならば、八月の末には「河射角」の星空が見られた。それもさらに舊暦になおさねばならぬから、結局「河射角」とみたられそうな星空は、二千年前にあつては立秋のころの昏の昏のそれであると考えられる。するとこのころから秋の夜長となることであるから次の句の「堪夜作〔夜作に堪ふ〕」とは、夜業ができる、ということであらうか。

いま錢大昕が「促織初鳴河射角」という句を組みたてた背後にはこれだけの思考が潜むであらう。もつとも、この句のもつ立秋という季節感覚は、曆日そのものをあらわそうとするよりも、冬を迎えるしたくにいそしむ秋の夜の夜なべのさまをうたう次の句をひき出すに備えて設けられているもので、この詩の流れからみても、すでに十月一日を過ぎてのちのこととしてよむほうが自然であらう。「篝鐙」の「鐙」は「燈」に同じ。ともし火をかごでおおうこと、陳彭年の故事にもとづく。そのかごをもれる一縷のひかりをさえ、子どもたちの安眠をさまたげはせぬかと気にかけてながら、せつせと夜業にはげむ。「弁」は蓋覆する、おおうこと。素朴な農語の「堪夜作」三字を言い換えたのが「篝鐙」の一句である、ということになる。

ついでながら四民月令に引く農語の次の二句、「掣星浚、水生骨」とは、大火(アンタレス *Antares*)が夕空にみえなくなる季節になると、水には薄氷がはる、ということであらうか。昏の時刻に「河射角」という天象が望める季節には、まだ大火も西空に望まれた。それはまさしく「七月流火」(詩幽風七月)の季節であり、「河射角、堪夜作」の農語は、これをもし詩經幽風の農人の口の端にのぼすならば、「七月流火、九月授衣」となるものといえよう。その西に流れた大火もさらに完全に没して現れない季節が来ると、水に骨が生ずる、というのであるから、それは陰曆十月であらう。禮記の月令に「孟冬の月、…水始めて氷る」とみえる。してみるとこの四民月令に引く農語四句は、前二句は立秋ころ、後二句は孟冬十月をうたうとよみうることになる。これには勿論まだ多くの疑念が残っている。一

体、彗星を大火としてよいのか。野尻抱影氏は古詩源からこの句を引いて、「支那にも彗星という星がある。…火星と注されているが、私は首肯し難い。寧ろこれは英國でいう plough (犁) と同じく、北斗のことと解したら、形はもちろん、その沈む『水骨を生ずる』季節と一致するだろう、」といわれる(『日本の星』昭和十一年研究社)。いまのところ彗星を大火としうる確證をえないと同様に、北斗としうる根據もない。ただ後半二句が冬であることには異議を受けないことと思う。(この聯の注には本学工学部理博 福島久雄教授・お茶の水女子大学教授 頼惟勤氏の教示に負う部分がある)

最後に、いま注に四民月令の遺文を引くに際して、古詩源に依つたことについては、その意味を釋しておく必要がある。「河射角」以下の四句を、嚴氏はその全後漢文に古詩紀によつて録すことは、さきに述べたとおりであり、また「三月昏」以下の四句は、齊民要術卷二に引くによつて残るものなのである。ところで古詩源は清の沈德潛の輯に成り、その卷一は古逸の目を立てて、古詩紀からとくに雅正なものを選んだということを、みずから卷首の例言に記している。いまこの「河射角」以下四句などはほかに正史にも諸子の書にもみえるわけではないので、注に引くには遡つて古詩紀よりするのが當然である。それをいまあえて古詩源に依つたのには理由がある。錢大昕はいわゆる呉中七子の冠であるが、その呉中七子はこの古詩源を輯した沈德潛の門下に出たとするのが通説である。もつとも、清朝學人の詩の系譜としてみると、この通説には疑問があることを、わたくしは前掲拙論「錢大昕の文學」及び「惠棟と錢大昕」において指摘している。しかしたとえ一年に滿つか滿たぬかの期間にすぎなかつたにせよ、沈德潛が院長であつた蘇州の紫陽書院に、錢大昕が學んだことは事實である。それは乾隆十五年(二七五〇)から十六年秋にかけてであつた。一方、沈德潛が古詩源を編んだのは康熙五十八年(二七一九)であつたのであるから、若い日の錢大昕がこの書物を手にした可能性は充分に想定できる。いまはひとえにこの可能性のゆえにこそ、沈德潛との關係を想起すべく、あえて古詩源に引くところを以て注とした。

黄紗 夜紡 軒車 鬧

くわうさ よるつむ きやうしや かまひす
黄紗 夜紡きて 軒車 鬧しく

抱布 賤售 憂如 慘

ほうふ せんく うれひや うれひや
抱布 賤く 售りて 憂慘くが如し

44

〔御題棉花圖〕紡車之制、植木以駕輪、衝木以銜錠、紡者當軒、左握棉條、右轉輪弦、錠隨弦動、自然抽緒、如繰絲

然、曰紡綫、…吳淞間曰紡紗、以足運輪、一手嘗引三紗五紗、用力較省。〔詩衛風氓〕氓之蚩蚩、抱布貿絲、〔傳〕

布幣也、〔箋〕幣者所以貿買物也、季春始蠶、孟夏賣絲。〔又小雅節南山〕憂心如慘、〔傳〕慘燔也。

「黄紗」の紗とは麻や棉をつむいで絲としたもの。さきにみえた「霜黄」の花桃からつむぎ成した絲は黄紗となるのであろう。「軒車」は紡車、いとくりぐるまでである。これに注した御題棉花圖は第十一圖紡綫である。

紡車の製法は豎たての木に車を載せ、横の木に錠を挟む。紡ぐ人は車の前に位置して、左手に長い綿塊を握り、右手で車の輪を廻轉させる。錠は車の輪につれて動き自然に糸口を引き出すこと、絹絲を紡ぐ場合の如くである。こ

れを紡棧 fang shan という。（吉川譯）

「抱布」とは布を抱くこと、そして詩の傳箋によれば布は幣であるから、貨幣をもって來て物を買うこと。ここはその人を意味する。氓の詩のこの句は絲を買いに來た男のことをうたうのであるから、用典はことに精確といえよう。絲買いに安い値で賣つてしまつて、夜なべしてやつと紡いだ絲も、黄紗のこととて品が悪いとされる。絲買いに安い値にたたかれて手放してしまい、身を焼かれる思いをする。

我農 經年 長碌 碌

わ のうとし へ なが ろくろく
我が農 年を経て 長く碌碌

夫豈 本性 由來 耽

そ あ ほんせい ゆらい たん
夫れ豈に 本性 由來 耽ならんや

〔詩衛風氓〕于嗟女兮、無與士耽、〔傳〕耽樂也、〔箋〕耽非禮之樂。

45

詩はここから農夫の嘆聲を寫して結ぶ。畑づくりに従事して幾年もたつこのわしが、いつまでもいっこう変りばえがせぬ、それが生れついで遊び好きのためなどで、どうしてあろう。

官租 私債 償未足

吁嗟 筋力 何以堪

くわんそ しさい つぐな いまだ た
官租 私債 償ふに未だ足らず
あきんりよく なに もつ た
吁嗟 筋力 何を以てか堪へん

〔禮記曲禮上〕貧者不以貨財為禮、老者不以筋力為禮。

おかみへ収める租税の滞納分、私の負債、それぞれ辨償するにも足りない。しかももうこれ以上の労働にはとても堪えきれない。

吁嗟 筋力 何以堪

明年 力作 催丁男

あきんりよく なに もつ た
吁嗟 筋力 何を以てか堪へん
みようねんりきさく ていだんうなが
明年 力作 丁男を催す

〔晉書陶侃傳〕若力作所致、雖微必喜。〔史記主父偃傳〕發天下丁男、以守北河。

いまから氣がかりなのは來年の畑しごと。その働き手が丁男に徴集されることである。

〔補注〕

浙西六家の一人、錢擇石、名は載（一七〇八一—一七九三）に「木棉歎」の作がある。國朝詩鐸に収めるところによつてここに録し、錢大昕の作との比較に供することとする。錢載は浙江秀水の人。乾隆十七年（一七五二）の進士で、官は禮部侍郎に至った。浙西六家と呉中七子、及び錢載については近藤「清詩選」第三編「格調と性靈」を参照。

我聞木棉花 傳自袁牢林 邑高昌國 地氣江淮本相得 葉似青楓花似葵 花鈴倒挂同攀枝 涼秋八月白藤吐

一朶半朶科頭垂 科頭垂 哭村姥 昨日風 今日雨 上岡涇多草 下岡涇無土 花熟防風更防雨 怕似鄰州

去年苦 去年崇明上海海波嘯 人家屋頂龍鱗掉 舊時岡隴種花處 夜夜陰寒鬼燐照 我家祖種橫瀝黃沙田

海啞風雨愁相煎 諺云 山嶺海潮來 海啞風雨多 啞音鋤 花荒官私兩無辨 不紡不織何能延 黃婆廟 烏泥涇

天晴獻雞酒 願乞黃婆靈 我田若可種稻還種麥 更送春風紙錢百

我々は聞く木棉の花 哀牢・林邑・高昌國自り傳はると 地氣江淮本と相得たり 葉は青楓に似て花は葵に

似 花鈴さかしま倒に挂りて同に枝に攀づ 涼秋八月白絲吐き 一朶半朶科頭垂る 科頭垂れ 村姥を哭せしむ

昨日は風ふき 今日雨ふる 上岡涇つて草多く 下岡涇つて土無し 花熟せば風を防ぎ更に雨を防がんも

のを 怕る鄰州が去年の苦の似くなるを 去年崇明・上海海波嘯き 人家の屋頂に龍鱗掉は 舊時岡隴花

を種ゑし處 夜夜陰寒として鬼燐照る 我が家の祖種橫瀝黃沙の田 海啞風雨愁相煎うれひのせま 諺に云ふ 山嶺さんりやうき

て海潮來り 海啞して風雨多しと 啞音鋤 花荒れて官私兩ふたつながら辨ずる無し 紡がず織らず何ぞ能く延べん

黃婆の廟 烏泥の涇 天晴るれば雞酒を獻ぜん 願くは黃婆の靈に乞はん 我が田若し稻を種え還た麥を種

う可くんば 更に春風に紙錢百を送らん

この詩は彈石齋詩集（京都大学人文科学研究所蔵光緒四年重刊蘇州交通圖書館印本）の卷一にみえる。卷一に収めるのは丁巳、すなわち乾隆二年（一七三七）の作であり、錢載の存する詩はこの年に始まる。時に三十歳。錢大昕の作に先だつこと十年。換韻の歌行体である。

錢大昕が「嚶城」の土地に即して歌うのに對して、錢載もまた崇明・上海を隣州とする「橫瀝」の地をいう。しかしこれはただ地名たるとどまる感がある。横瀝とは嘉定縣境を流れ呉淞江に注ぐ川の名である。大清一統志太倉州の山川にみえる。次に、錢載の詩もまた棉花の來源とその花様を説くところから歌いはじめてはいるが、この點ではむしろ文人と學人との相違が瀝然と現われてくる。そして錢載がうたう農夫の嘆はもっぱら自然の恐畏、ほとんど人

力を超えた天災であるが、錢大昕がうたう田家の悲しみは人為に在る。苛酷な自然とのたたかいは克ち得ても、經濟機構の矛盾や政治の圧力のもとには、ついに為すすべを知らぬ田夫の姿がみられるのと、よい對照をなしている。ことにその苦悩からの救いを、錢載は農夫とともに黃道婆の廟に眞摯に祈るがごとくであるが、さきに指摘したとおり錢大昕は福を授けると稱する神もまた、農民からの搾取をねらう欺瞞者のかくれみのにすぎぬことを看破するところ、もつともはなはだしい相違點といえよう。

錢大昕と錢載とには、ともに翰林の官にあつての交友の跡がみられる。潜研堂詩集についてみても、錢大昕は錢載の家の庭の菊を賞す宴に招かれたり（卷七、乾隆二十七年、冬至の後六日程芻芳らとともに招かれるなど（卷八、乾隆三十一年）している。乾隆三十五年の三月廿二日には、ともに法源寺に海棠を觀にゆき、遼の大安十年の觀音菩薩地宮舍利石函記をみつけたこともある（卷十）。錢大昕にとつては翰林の先輩であつた。しかし錢載の人の柄を知る一つの資料として記すならば、この人は翁方綱とともにではあるが、かの戴震を四庫全書館から追い出そうと圖つたということが、李慈銘の越漫堂讀書記にみえる。いかにも官人の見である。

〔附記〕 本稿の原稿は正体漢字に統一して書いたが、組みあがつた版は、資料中・本文中とも当用漢字の略体と混用されて来た。印刷の困難を慮つて、そのいづれにも整理することなく、混用のままで校正を行なうこととした。とはいえたえば「芸」と「藝」、「余」と「餘」など、訓詁のうえで、辨別を要するものの混用まで看過することは、もとよりないので、この便宜的な態度が本稿に引く資料の信憑性を減じる恐れはないはずである。

〔又〕 本誌に附される欧文レヂメにおけるわたくしのそれは、畏友 秋間実氏の友情によって寄せられたものである。